

英語科における実践的コミュニケーション能力を
養成する表現活動
ーコミュニケーションクラスを取り入れてー

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
156013 谷川友紀

英語科における実践的コミュニケーション能力を養成する表現活動 ーコミュニケーションクラスを取り入れてー

谷川友紀

授業力高度化コース

要約：本研究は、実践的コミュニケーション能力の養成を目的とし、その実現のためにコミュニケーションクラスの考え方を取り入れた指導の在り方を考察している。グローバル化の進展により予測困難な未来を子どもたちが切り開く上で、実践的コミュニケーション能力を身に付けることは大きな武器となりその可能性を広げるだろう。本授業実践で身に付けさせたい実践的コミュニケーション能力は「伝えたいと思ったことを実際に他者に伝えることができる能力」とし、コミュニケーションクラスの言語形式重視の指導と意味重視の指導の両立を目指す考えのもと、他者意識に重点を置く表現活動を中心とした単元開発を行った。他者に伝えたいという意欲と他者評価が表現活動にもたらす効果と、生徒の背景知識と英語知識とのギャップを埋めること、他者を意識し他者に伝える力の育成、表現・技術力の評価方法の工夫、の3課題をデータ分析より明らかにし、課題の改善策を考案した。

キーワード：実践的コミュニケーション能力 コミュニケーションクラス 他者意識

1. はじめに

平成 29 年 3 月告示の新学習指導要領では、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。」と示されている。この他にも、人工知能（AI）の進化により、社会の雇用構造や学校教育の在り方も伴って大きく変化していくと考えられる。こうした世界の流れの中で実践的コミュニケーション能力を身に付けることは、子どもたちが未来を切り開いていく上で大きな武器となり、その可能性を広げるだろう。また、実践的コミュニケーション能力を身に付けることで発信力の向上にも結びつくと考える。この自身の考えと現状への問題意識から、大下邦幸（2009）の提唱する「コミュニケーションクラス」の考えを参照しながら、実践的コミュニケーション能力の養成を目指し、「他者を意識し、英語で自分の表現したいことを表現する力を身に付ける授業」の在り方を、自身

の授業実践をもとより考察する。

2. 英語科における実践的コミュニケーション能力の定義

実践的コミュニケーション能力とはどのような力を指すのか、その定義を文部科学省中学校学習指導要領の変遷より考察し明らかにする。

平成元年告示の学習指導要領において、日本の英語教育で初めてコミュニケーション能力養成が意識されるようになった。外国語科の目標として、「外国語を理解し、外国語で表現する（基礎的な）能力を養う」「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが明記された。これにて初めてコミュニケーション能力養成が外国語科の重要目標として明確化されたのである。加えて、平成 10 年告示の学習指導要領はコミュニケーション能力養成をより重視し強調するものとなっている。外国語科の目標として、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」と明記された。実践的コミュニケーション能力という用語はここで初登場し、これが意味するところは『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説－外国語編－』により、「単に外国語の文法規則や語彙についての知識を持っているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである」と示されている。つまり、コミュニケーション能力の養成のためには知識習得型の学習だけでなく、実践的な場を想定しコミュニケーションツールとして英語を使う学習が必要となる。

文部科学省は平成 29 年 3 月告示の新学習指導要領において外国語科の目標として、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す」と示している。また、外国語指導目標を「聞くこと、読むこと、話すこと [やりとり]、話すこと [発表]、書くことの五つの領域別に設定する」とした。これまで以上に話すことに重点を置き、5 技能の資質・能力向上を目指し取り組むこととなる。平成元年より約 30 年経った現在においても、日本の英語教育においてコミュニケーション能力養成は中心目標であり、同時に重要課題なのである。

本研究では実践的コミュニケーション能力を、上述の平成 10 年中学校学習指導要領外国語編の定義「単に外国語の文法規則や語彙についての知識を持っているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力」を念頭に置きつつ、

その上で本授業実践における養成したい実践的コミュニケーション能力を狭義として、「伝えたいと思ったことを実際に他者に伝えることができる能力」と設定する。他者を意識して表現活動を行った結果、どれだけ実際に他者に思いを伝えることができたかが実践的コミュニケーション能力の修得を計る指標になるという考えのもと、他者意識に重点を置いた。

3. 言語形式重視と意味重視の指導の両立を目指すコミュニカティブクラス

3.1 コミュニカティブクラスの概要

実践的コミュニケーション能力養成には、大下（2009）の「コミュニカティブクラス」の指導が効果的と考える。コミュニカティブクラス（以下 CC）とは、「授業そのものをコミュニケーションの場と捉え、英語を媒体として授業を行うことにより、英語知識の獲得とコミュニケーションの場の確保の両方が可能になる授業のあり方」と定義される。言語形式重視の指導（form-focused instruction: 以下 FFI）を中心軸としながらも、意味重視の指導（meaning-focused instruction: 以下 MFI）の実現も同時に目指すものである。Ellis(1990)は、FFI を「音韻、語彙、統語などの言語知識を教えたり、それらを定着させるために行う練習や活動を指す」、また MFI を「言語的手段、非言語的手段を問わず、学習者が持っている能力をフルに発揮してコミュニケーションを行うように促す指導」、であると定義している。

CC の特徴は以下のように挙げられる。①授業をコミュニケーションの場ととらえる、②英語を媒体として授業を行う、③授業をコミュニカティブに行う、④背景知識や生活経験を活用する、⑤学習者の自己関与度を高める、⑥教師と生徒で授業を作り上げる、⑦生徒は授業で物知りになる。CC では、単なる情報授受の活動だけでは満足せず、生徒の意見や考え、いわばメッセージが反映されるようなコミュニケーションをできるだけ多く授業の中で確保しようとする。授業でメッセージのやりとりを活性化するための方法を大下は以下のように挙げている。

(1) I の重視

自分自身のことを語ることで、メッセージ性が高くなる。

(2) 生徒の意見や考えが反映するように活動を仕組む

生徒の考えや意見に注目し、生徒の情意面にインパクトを与える。

(3) 意見・考えを述べるための表現の援助

意見や考えを述べるための表現は早い時期に決まり文句(formula)として憶えさせる。

(4) 生徒の考える時間の確保

考える時間を与えることで生徒が用いる文法や語彙が洗練させたものになり、言語知識の体系の再構成が促される。

以上を踏まえ、筆者が本研究において特に注目したい CC の特徴を次のようにまとめる。CC 授業では大下の「メッセージ重視の指導」が重要となり、これは生徒の自己関連性の高さを重視し、生徒自身の考えや思いを表現活動において反映させるアプローチである。生徒自身に関する情報・経験・考え・思いは、生徒個人の中に唯一存在するものであり、何よりも他者に伝える価値があるものだからだ。また、これらは生徒の表現意欲を高めるものであるとされる。

CC は、言語習得に欠かせない FFI を重視しながらも、授業全体がコミュニカティブになるような様々な工夫をしながら授業を進め、MFI の実現も目指している。言語内容面と表現面ともに質の高いコミュニケーション活動の実現が可能であり、実践的コミュニケーション能力養成において有効であると考えられる。

3.2 コミュニカティブクラスの課題

実践的コミュニケーション能力養成を目指し、CC の考えを基に授業を構成する際には、CC の課題を事前に把握し、生徒の反応とその影響を考慮した上で行う必要がある。大下は CC には解決しなければならない課題が 3 点あると述べている。

1 点目は、「生徒側の認知的負荷 (cognitive load) が重い」点である。認知的負荷とは、「情報を処理する際に我々が感じる負荷」である。一般に外国語の学習において、生徒が言語形式のみに意識を向ける場合は、認知的負荷が軽く、言語形式と意味の両方に意識を向けなければならない場合は、認知的負荷が重くなる (Skehan, 1996) と考えられている。一般的にコミュニケーション活動は負荷が重い活動である。特に生徒が自分の意見や考えを述べるメッセージ性の高い活動は、「単に情報のやりとりをすればよいと言うのではなく、得た情報について自分なりに解釈を加え、述べたいと思うメッセージを構成するという作業がさらに加わることになるので、生徒にとっては相当に大きな負荷となる」とされている。この認知的負荷の軽減が成功の鍵となるとされ、対策として①生徒に準備時間を十分に与える、②表現活動前にプレ活動としてメッセージを構成するのに必要な語彙や表現を事前に与えておく、あるいは、ある程度の予備知識を与えておく等が挙げられる。

2 点目は、「生徒の言いたいことと持っている英語知識とのギャップが問題になる」点である。メッセージ性が高くなるほど比例してそのギャップは大きくなるため、いかにしてこのギャップ

プを埋めるかが焦点となる。この問題に関しては大下も現段階では妙案はないと述べている。パラフレーズなどのコミュニケーション・ストラテジーを教える、または一部日本語の使用を認めることなどが改善策として考えられている。

3点目は、CCは生徒にとって高いリスクがある点である。これの意味するところは、メッセージ性の高い活動では生徒がある意味で自分を曝け出すことになるため、心理的にリスクの高い活動となり得るということである。このリスクの軽減のため、教師には受容的な態度で生徒に接すること、また、生徒が活動に取り組んだ結果については原則として肯定的なコメントや評価を与えることが求められる。これらは生徒同士間においても同様である。

3.3 コミュニカティブクラスと自身の授業実践

筆者は大下の提唱する「コミュニケーションクラス」の考えをもとに、他者を意識して表現活動を行った結果、どれだけ実際に他者に思いを伝えることができたかが実践的コミュニケーション能力の修得を計る指標になると考えた。そして、自身の授業実践を「他者を意識し、英語で自分の表現したいことを表現する力を身に付ける授業」と位置づけた。これは大下の「メッセージ重視の指導」の考えを取り入れた表現活動を取り入れ、他者を意識することをその重要な目標とした。生徒が他者に伝えようという思いを持って活動に取り組み、伝わったと他者から評価を受け、その評価とともに何が足りなかったか、次回意識して取り組みたいことなど自分で振り返って自己評価をする、という一連のサイクルを作ることが実践的コミュニケーション能力養成の土台となると考えたからである。この視点に基づき、本実践が実践的コミュニケーション能力養成に有効であったのかどうか考察を行う。

4. 授業実践と分析

4.1 授業実践の概要

中学校第3学年3クラス、Unit2 From the Other Side of the Earthにおける全5時間の授業実践である。1時限と2時限において授業冒頭の帯活動として、主に上述の意味重視の指導(MFI)に重点を置き、他者意識を持ちながら即興で他者に伝える力の養成を目指す表現活動を行った。具体的内容は、各回テーマを提示し(①ゴールデンウィーク中にしたこと、②修学旅行でしたいこと)、生徒各自にそのテーマについて1分間話すことを考えさせた。その後2人ペアに分かれて、1分間テーマについて交互に発表させた。そして最後に、相手が話していた内容をワークシートに記入する時間を設けた。1回目はワークシート記入を日本語可とし、2

回目は全て英語で記入するよう指示を行った。1 回目の活動では生徒の約 50%がワークシートを日本語にて記入し、全体として 3 行以上で相手の発表内容を書いていた。一方で 2 回目の活動では、英語でのワークシート記入を指示したため全体として記入された行数は減少し、1 行のみの記入例も目立った。他者を意識しながら話し、相手の話を一生懸命聞き取る、という表現活動に欠かせない力の練習の場を提供できたことは良かった点である。しかし、聞き取ったことを英語で書くことについて課題がみられた。この課題の改善のため、以降の表現活動では言語形式重視の指導にも力を入れ、英作文を行う際は思考整理と個別対応の時間を意識的に設けるようにした。

3 時限と 4 時限において、生徒自身のお気に入りの持ち物を紹介する表現活動を行った。モデル紹介、構想、英作文執筆、発表練習、発表、自己の振り返り、他者評価活動、を含む計 2 時間の授業実践である。本活動においては、本単元の新出文法表現である現在完了形の継続用法[have/has+過去分詞]と、前単元での既習事項である受け身の表現[be 動詞+過去分詞]を必ず用いるよう指示した。ワークシートを使用し、その構成は、目標提示、選んだ持ち物とそれに関する情報（いつどこで買った、所持/使用期間、特徴、お気に入りの理由等）、既習表現の復習事項、英作部分、発表時のルール事項、自己の振り返り欄である。次ページの図 1 は授業で生徒が使用したワークシートである。表面には目標として、①自分のお気に入りの持ち物について 5 文以上で紹介できる、②聞き手を意識して話すことができる、③友達の紹介を聞いてコメントを返すことができる、の 3 点を提示した。裏面には発表時のルールとして、①3～4 人 1 組の小グループで行う、②順番を決めて各グループ 1 人ずつ発表する、③発表をよく聞き、発表後に必ずコメントをする、④コメントはワークシートに記入する（日本語可）、の 4 点を示した。生徒はそれぞれ他者に対して 2～3 枚のコメントシートを書いて渡し、また発表後には他者から同様に受け取った。

本活動で生徒が他者に向けて英語で表現したい思いとは持ち物に対する思い入れと愛着であったと考える。生徒はこれらを伝えるために、他者を納得させるだけの情報と表現力だけでなく、他者の発表に対しコメントを返すことも目標提示したことより、内容理解力と自分の考えたことや感じたことを整理し即興で他者に伝える力も求められた。本活動は技能統合型の言語活動であり、難度の高い学習課題であった。

赤色が好きだからお気に入りである、などと紹介している。

生徒が他者の表現活動を聞いて書いたコメントシートからは、「シャーペンをずっとつかっているのが伝わった。シャーペンへの愛が伝わったよ。」「声が大きく、ゆっくり話していて伝わりやすかった。原稿を見ていなかったの、よりよく伝わった。」等のコメントが書かれており、これらを基に加点し評価を行った。

表現活動の発表時、生徒たちは各グループ 3～4 人で机を合わせ、各自お気に入りの持ち物を手にして見せながら紹介する様子が見られた。内容は上述の他、キーホルダー、多機能ペン、靴、ラケット、はさみ、しおり、辞書、グローブ、制服、ドラムスティック、クリアファイル等、多種多様な持ち物が取り上げられた。緊張したり、恥ずかしがったりする様子も多く見受けられたが、聞き手は温かく見守りながらも熱心に紹介に耳を傾けていた。中には大きな笑い声が生まれ、たいへん大きな盛り上がりを見せたグループもあった。準備練習した内容を一生懸命にジェスチャーやアイコンタクトを交えながら伝える生徒の様子が印象的であった。

4.2 授業実践の表現活動の評価基準

表 1 表現活動の評価基準

ワークシート (文法項目・正確さ)	1. 5 文書けている
	2. 現在完了継続用法文の有無
	3. 受け身表現文の有無
	4. お気に入りの理由が書けているか
	5. 全文の動詞が正確か
他者からのコメントシート (表現・技術力)	1. 声の大きさ
	2. 聞きやすさ (Fluency, 発音)
	3. 話すスピード
	4. 暗唱できているか
	5. アイコンタクト、表情、愛着/思いが伝わったか

表 2 表現活動の評定分布

評定	A	B	C	D
スコア	10/9/8	7/6	5/4/3	2 以下
人数	9	36	15	2

本表現活動の評価を、生徒各自のワークシートと他者からのコメントシートを合算し行った。ワークシートとコメントシートにはそれぞれ 5 観点項目を設け、前者からは文法項目やその正確さを、後者からは表現・技術力を観点別に計 10 点満点で評価した。前者の 5 項目は、①5

文書けている、②現在完了継続用法文の有無、③受身表現文の有無、④お気に入りの理由が書けている、⑤全文の動詞用法が正確か、である。後者の5項目は、①声の大きさ、②聞きやすさ（流暢さ/発音）、③話すスピード、④暗唱できているか、⑤アイコンタクト、表情、愛着/思いが伝わったか、とした。総合スコア8点以上をA、6点7点をB、3点以上5点以下をC、2点以下をD、とした。上記の表1は表現活動評価基準を、表2は表現活動の評価分布を示した。

4.3 授業実践の成果と課題

学年全体において学力格差が大きく、また、技能統合型の言語活動で生徒にとって認知的負荷が重い学習課題であったにもかかわらず、72.6%の生徒がB基準を満たしたことは一つの成果であると考えられる。B基準生徒の自己の振り返りからは、「次はもっとアイコンタクトを意識して発表したい」「もっと文章を詳しく書きたい」といった反省を踏まえながらも前向きな意見が多かった。A基準生徒の振り返りからは、「難しかったが面白かった」「次は原稿を見ずに言えるようにしたい」等の意見が多く、活動を楽しみながらそれぞれ新たな課題を見つけていた。C基準生徒においては、「発表は楽しかった」等の肯定的な意見があった一方で、「自分が思っていることを英語にするのが難しかった」「英文を作るのが難しかった」という意見もあった。自身の英作文能力における課題への気づきがあった点は評価できるが、生徒が持っている背景知識と英語知識とを結びつける過程においてつまずきがあった点は課題である。この意見はB基準生徒でも多く出た。

下記の表3は、表現活動にてB基準（計6点または7点）を満たした生徒の、他者からのコメントシートをもとにした表現・技術力の評価点数内訳である。このデータから明らかになったのは、B基準生徒のうち表現・技術力評価(5点満点)において4点以上を獲得した生徒は一人もおらず、2点しか獲得していない生徒が大半を占めたという結果である。これは、ワークシートの文法項目・正確さの評価において比較的高い点数を取れたことにより総合的評価としてB基準を満たしたのであり、A基準を満たすためには表現・技術力のさらなる向上が必要であると考えられる。

同時に、表3のデータ結果からは、他者からのコメントシートを基に加点制で評価を行ったことへの課題も浮き彫りになった。それは、他者の発表を聞いた感想を自由記述としたため、その内容や記述量に差が生まれたことである。枠や項目にとらわれず率直な意見が記述されたことは良かった点である。しかし、1グループ3人または4人編成としたため、加点制評価の基となるコメントの量が全ての生徒にとって十分であったとは言えない。表現・技術力の向上

だけでなく、その評価方法にも今後工夫が求められるだろう。

本表現活動で全体的に多く見られた感想は、「自分が持ち物をこんなに大切にしていると気づいた」「緊張で聞き手をあまり意識できなかった」「みんなの発表を聞いて次はもっと頑張りたいと思った」というものだった。これより、大多数の生徒が本活動を通して新たな自己・課題の発見ができたと考えられる。しかし、こうした成果の一方で、生徒の背景知識と英語知識とのギャップをいかに埋めていくか、他者を意識し他者に伝える力の育成、そして表現・技術力の評価方法の工夫が今後の課題である。

表 3 B 基準生徒 表現・技術力評価内訳

スコア	4.5 点	3 点	2 点	1 点
人数	0	10	22	4
全体の割合	0%	28%	61%	11%

4.4 課題の改善策

前述の、生徒の背景知識と英語知識とのギャップをいかに埋めていくか、他者を意識し他者に伝える力の育成、そして表現・技術力の評価方法の工夫、という課題を解決するための改善策を 3 点考案した。

1 点目は、「1 Minute Talk」である。これは筆者が専門実習にて考案し試作段階に終わったものだ。下記図 4 は活動にて使用するワークシートを示した。教師があるテーマを与え、そのテーマについてまずは生徒各自に 1 分考える時間を与える。テーマは時期に応じて、ゴールデンウィークについて、冬休みの予定等を設定する。次にペアでその内容を 1 人ずつ英語で発表させる。生徒は他者の発表を聞き、伝わったことや理解したことをワークシートにメモとして残していく。そのワークシートは最終的に他者から発表者本人に返却され、ワークシートには他にも本人が話したこと（話したかったこと）について書いて振り返る欄を設ける。これをポートフォリオにし保存していくことで、今回の反省点や次回への課題、また回数を重ねるごとに他者に伝える力が向上していること等が視覚的にも実感できると予測する。継続的に取り組むことで、生徒の背景知識と英語知識とのギャップを埋めていき、他者を意識し他者に伝える力の育成を目指したい。

2 点目は、「Respond Phrases List」である。これは表現活動の発表時において使用するもので、生徒が他者の発表に対し自分の思ったことや考えたことを伝えるのを手助けするための使えるフレーズリストである。肯定的な語彙やフレーズ、疑問に思うことや詳しく聞きたいこと

を尋ねられるフレーズ等を記載したリストペーパーを予め生徒に配布しておくことで、生徒の語彙力の向上と即興で他者に伝える力の育成に結びつくと考える。リスト内フレーズの定着が図れば、より創作的なフレーズを生徒が独自に考え伝えることができるようになる。

3点目は、「他者評価コメントシート改善版」である。発表を含む表現活動を行う際には、他者からのフィードバックは非常に重要だ。表現・技術力の評価方法の改善を図るため、改善版では本表現活動評価の自由記述に加える形で、生徒に評価基準項目を提示し、特に良かったと思う項目を複数回答可として印を付けさせる。そして、他者評価コメントシートを加点制方式評価に用いる場合は、1グループ構成を5人程度にすることで評価材料を十分に確保できると考える。下記図5はコメントシートの改善版である。

図4 1 Minute Talk ワークシート

1. 声の大きさ	
2. 聞きやすさ(Fluency, Pronunciation)	
3. 話すスピード	
4. 暗唱できているか	
5. アイコンタクト、表情、愛着/思いが伝わったか	

図5 他者評価コメントシート改善版

5. おわりに

本授業実践を「他者を意識し、英語で自分の表現したいことを表現する力を身に付ける授業」と位置づけ、本時で身に付けさせたい実践的コミュニケーション能力を「伝えたいと思ったことを実際に他者に伝えることができる能力」と設定した。大下のコミュニケーションクラスの考えをもとに筆者は他者を意識して表現活動を行うことに重点を置いた。3章では「生徒が他者に伝えようという思いを持って活動に取り組み、伝わったと他者から評価を受け、その評価と

ともに何が足りなかったか、次回意識して取り組みたいことなど自分で振り返って自己評価をする、という一連のサイクルを作ることが実践的コミュニケーション能力養成の土台となる」と述べた。4章の授業実践の分析結果からは、生徒は他者に伝えたいという思いを持って活動に取り組むことができおり、次回への意欲に結びつく自己の振り返りができていたことがわかった。しかし、課題として生徒の背景知識と英語知識とのギャップを埋めること、他者を意識し他者に伝える力の育成、そして表現・技術力の評価方法の工夫が挙げられた。これらの課題を改善するため、授業内の帯活動として継続的に行う表現活動、生徒の語彙力と即興で他者に伝える力の育成のための語彙リスト、表現・技術力の評価材料を十分に確保する他者評価コメントシート改善版、を考案した。以上を踏まえ、本授業実践は改善を求められるものの、実践的コミュニケーション能力養成に有効であったと考察する。今後、継続的なカリキュラムとして日頃より技能統合型の言語活動を導入し、長期的な視点を持って実践的コミュニケーション能力養成を目指し、単元開発を行っていくことが必要となる。その際には、学校教育という時間的制限がある中で取り組んでいくこと、教員側への高いコミュニケーション能力と言語知識の要求という負担があることを留意しなければならない。

引用・参考文献

- ・大下邦幸(2009)『コミュニカティブクラスのすすめ コミュニケーション能力養成の新たな展望』東京書籍
- ・文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議(2014)『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告』
- ・文部科学省(1988)『中学校学習指導要領 外国語編』
- ・文部科学省(1998)『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領 外国語編』
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- ・文部科学省(2014)『平成 26 年度英語教育実施状況調査』
- ・Ellis, R. (1990) *Instructed second language acquisition*. Oxford: Basil Blackwell
- ・Skehan, P. (1996) *A framework for the implementation of task based instruction*. *Applied Linguistics*, 17, pp. 38-62